

「仮名」の原義について

中山^{なかやま} 陽介^{ようすけ}（國學院大學大学院）

第一節 「仮名」の語義の問題点

①日本で漢字から脱化して出来た独自の表音文字に二種類ある。漢字の部分を抽出する方法を軸にして出来た片仮名と、漢字の全体を書き崩す方法を軸にして出来た平仮名である（本発表では、「平仮名」「片仮名」にそれぞれいわゆる変体仮名の字を含める）。

②「平仮名」の語は室町時代の成立で¹、平安時代には平仮名のことを指して単に「仮名」（かな、かみな、かなな。以下「仮名」と書く）と呼んでいた。万葉仮名を指すとされる「男手」に対して平仮名を指すとされる「女手」という語もあったが、「仮名」と呼ぶ方が普通で、平安時代以降「女手」「男手」の語は見られなくなる。

③しかし、平安時代の「仮名」の語の対象は平仮名に限らず、広義には草仮名や万葉仮名がその範疇に含まれていた。平安時代、片仮名に既に「片仮名」の語があったのに対して、どうして平仮名は、「平仮名」のような「仮名」の派生語ではなく、平仮名・片仮名および草仮名などの総称と同じ「仮名」で呼ばれたのか。

④そもそも、「仮名」という語自体、いつ頃どう発生し、元来どのような実態を指した言葉だったか、詳しく論じられてきていない。仮名の成立過程の問題とも直結する問題である。

⑤↓本発表では、「仮名」の語の発生当初の原義とその変遷を考える。平安時代の文献の「仮名」の語の用法の実態を検討した上で、その原義を推論し、結論として「仮名」は本来、万葉仮名を指したもので、そこから派生して平仮名を指すようになった、ということ論じる。

第二節 「仮名」の語が上代にあったとする説について

⑥近年、山田健三は、万葉仮名を漢字の一用法とする通説的理解を批判し、記紀万葉の歌表記などの仮名書き（一字一音の表音表記）を、上代既に「漢字」と「仮名」とが明瞭に区別されていたものとして捉える²³。

⑦そして、上代に「仮名」という語が存在したことを証明しようとして、「平仮名」「片仮名」が「仮名」の派生語であることから、平仮名・片仮名発生以前に、「仮名」と呼ばれた文字が存在していたと考える。（引用中の傍線は発表者。以下同）

「平仮名」「片仮名」という用語は、当然「仮名」という語が成立していなければ生まれ得ない。それぞれの語構造が「ひら」⁴「かな」⁵、「かた」⁶「かな」⁷であることは言うまでもない。平仮名、片仮名の実態フォルムも合わせて考えるならば、その「仮名」の指示実体は、視覚的には漢字と同一のものでなくてはならない。つまり、片仮名「イ」は、仮名

「伊」のカタなる仮名であり、平仮名「い」は、仮名「以」のヒラなる仮名、と理解すべき語構造によってできている。

つまり「仮名」ということは、いわゆる平仮名・片仮名が成立する以前に存在していたことは、上記の論理が導くところであるが、更に遡って上代において存在していた可能性も、いわゆる仮名書唱歌が万葉集・古事記・日本書紀に存在することからも極めて高いと考えられる。〔2〕

⑧推論上の問題点

- 一、「平仮名」という語は室町時代の成立で、平安時代の平仮名の呼称が「仮名」である以上、後世の「平仮名」の語から減算して「仮名」の語義を導き出すことはできない。
- 二、「片仮名」も、可能性としては、平仮名を指す「仮名」の語に対する別形態としての命名と想定することもでき、必ずしも万葉仮名に対する呼称とは限定できない。
- 三、万葉仮名は平安時代以降も使われているから、たとえ「仮名」が万葉仮名を指す語だったとしても、その語の成立を上代に遡らせるべき必然性は無い。
- 四、上代に万葉仮名の実態が確認できても、それに特定の名称があったとは断定できない。また、名称があったとしても「仮名」以外の可能性も排除できない。
- ⑨↓改めて、古代の文献に即して用法を分析し、帰納的にその意義を理解する必要がある。

第三節 平安時代の「仮名」の実例二義——平仮名を指す場合と万葉仮名を指す場合

⑩平安時代の仮名文学作品に見られる「仮名」は、基本は平仮名のことを指すとされる。

- (1) 「いたうな過ぐしたまひそ。にこやかなる方のなつかしさは、ことなるものを。真字のすすみたるほどに、仮名はしどけなき文字こそまじるめれ」

〔源氏物語・梅枝（新編全集）「4…416」417頁〕

- (2) 仮名はまだ書きたまはざりければ、片仮名に、「……」とある。

〔堤中納言物語・虫めづる姫君（新編全集）「5…414」414頁〕

- ⑪一方、単に「仮名」といっただけで万葉仮名を指す場合もある。一書の内両方の意義に用いられた例を挙げる（顕昭『万葉集時代難事』）。

⑫文字の種類の違いの意味合いを持つ「仮名」「真名」の例

- (3) 又古今眞名序、是紀淑望之作也。

〔万葉集時代難事（十二世紀後半成立、顕昭）（日本歌学大系）「6…62」62頁〕

- (4) 仍假名序ニ、年ハモ、トセアマリトカケリ。

〔同「6…63」63頁〕

⑬漢字による表音表記・表語表記の別を指した「仮名」「真名」の例

- (5) 二者、和歌書様不_レ同。或卷、假名書也。

安思比奇能、夜麻毛知可吉乎、保登等藝須 都奇多都麻泥爾 奈仁賀吉奈可奴

或卷、眞名書也。

昨日社 年者極之賀 春霞 春日山爾 速立爾來

〔同「6…65頁」〕

⑭↓「仮名」「真名」は文字の種類を指す場合と、(漢字上の)表語表記・表音表記の用法の別を指す場合とがあることが知られる。たとえば「真名仮名」は漢字による表音表記の意。

⑮「仮名」が万葉仮名を指す用法は、遡ると平安中期に見られる。

(6)或學二類聚國史・萬葉集・三代式等所レ用之假字一。水獸有二葦鹿之名一、山鳥有二稻負之號一、野草之中女郎花、海苔之彙於期菜等、是也。至下如二於期菜一者上、所レ謂六書法、其五曰二假借一、本無二其字一、依レ聲託レ事者乎。內典梵語亦復如レ是。

〔和名類聚抄(承平年間(九三一〜八)成立、源順)・序(元和古活字本)「7…551〜552頁」〕

(※句読・訓点は狩谷棧斎『箋注倭名類聚抄』を参考に私に附した)

※この「仮字」は、一字一音式(於期菜)だけでなく、意義による借字の例(女郎花)も含んでいる(狩谷棧斎『箋注倭名類聚抄』も参照「7…10頁」)。「かな」と読めるか存疑。「かな」と読めた場合、広義の万葉仮名を包含したことになる。確例ではない。

(7)元慶六年(右大臣宣、奉レ勅講レ之。例以二假名字一書二詠句序一)。

〔西宮記(十世紀中葉成立、源高明)・臨時二(神道大系。底本は大永本)「8…511頁」〕

(8)哥鉢大略如レ此。堪レ事者獻二一首一。若長哥作二序鉢一。宛如二史家講書一。件年、式部卿親王・太政大臣等、皆被レ出二和哥一也。自餘鉢繇レ是可レ知。書二哥鉢一、用二假名字一云々。

〔同・臨時七「8…792頁」〕

(※訓点は(7)(8)共に神道大系本による)

※日本紀竟宴和歌の先例を示した箇所。本妙寺本『日本紀竟宴和歌』に記された歌の一字一音式の万葉仮名表記は、詠者による当時の表記をよく留めていることが明らかにされている「9」(平仮名表記の歌・左注は院政期頃の作とされる)。(7)は末尾の「序」の字不審。諸本揺れあり。当条に見える「序」は漢文の序。壬生本(大永本の親本)を参照するにこの字は「云々」と思われる。紅葉山文庫本(壬生本の転写本)はこの字ナシ。

(9)大爲爾伊天奈徒武……衣不禰加計奴(謂之供名文字)

〔口遊(天禄元年(九七〇)序、源為憲)(真福寺本…弘長三年(一二六三)写)「10」〕

※「供」は「借」とされる「10…221〜222頁」。「供」とも「借」とも読める筆跡。

(10)先可知所付借字

以(伊) 呂(路) 波(八) 耳(尔) 本(保)……

〔金光明最勝王経音義(承暦三年(一一〇七九)写)「11」〕

※時代の降る例。訓注所用の万葉仮名を「借字」と称している。同様に「婆」「毗」などを「濁音借字」と称する。またリ・nを表す二種類の字も「借字」と称している。

- ⑩↓確例に乏しいが、万葉仮名を「仮名」と呼ぶことは十世紀に遡り、平仮名を指す仮名文字中の例とほぼ同時。「仮名」が仮名文字（平仮名・片仮名）を指す用法と、万葉仮名を指す用法と、どちらの方が先かが問題となる。

第四節 「仮名」の原義の考察

- ⑪「仮名」の原義につき、それぞれの場合を仮定すると、次のことが指摘できる。

い、「仮名」の原義を仮名文字とすると、「かな」の元の語形である「かりな」の「かり」の意義が明白でない。万葉仮名の意義とすれば、仮借の意として理解できる。

ろ、仮名文字の意義を原義とすると、万葉仮名の意義への派生を説明したい。万葉仮名を原義と仮定した場合、万葉仮名から平仮名への歴史的な変遷に沿って名称の指す対象の実態が変化したことで平仮名をも指すようになったと理解できる。

は、仮名文字の意義を原義とすると、片仮名が「片仮名」で平仮名が「仮名」である関係性が説明できない。万葉仮名の意義であれば、片仮名は万葉仮名の亜種としての命名、平仮名は万葉仮名の直系としてその呼称を引き継いだものと理解できる。

い、「かりな」の意義

- ⑫「仮名」の原義を仮名文字と仮定した場合、元の語形「かりな」の解釈は、「漢字を正式の文字と見て、それに対する仮の文字の意」（古語大鑑[12：107頁]）といったように、文字に対する価値観を表した語のように解されることが多く、またしばしば仮名を見下げた命名のよう解されがちであるが、物の名付けとしては観念的・抽象的な嫌いがある。しかし、平安時代頃の語で「かり」を冠する「かりそめ」「仮庵^{かりいほ}」「仮寝^{かりね}」「行宮^{かりみや}」といった語は、臨時的、しばらく、その場限り、といった意味であり、正・権のような価値的な意味は無い。

- ⑬本居宣長『古事記伝』や狩谷棧斎『転注説』は、「仮名」の意義を第一に万葉仮名に認め、「かり」を仮借の義と取っている。

- ⑭↓平安時代の漢文における「仮名」の語の表記は、前掲の如く「仮名」（西宮記）「借名」（口遊）「借字」（金光―）といった字が見られる。この「仮」「借」を借用・仮借の意に取れば、漢字の読みを借りる万葉仮名としての意義が明白である。

ろ、「仮名」の語義の派生過程

②①「仮名」の語が当初、仮名文字、特に平仮名に対する命名だったと仮定すると、「片仮名」は、仮名文字・平仮名を指す語の派生語ということになるが、この場合、片仮名が「仮名」の語を使った理由は、簡略化された文字という共通性から一応了解される。一方で、簡略化された文字という共通性を持たない万葉仮名を、接辞すら付けずに「仮名」と呼んでいることは、この立場からは理解しがたい。

②②むしろ、先に万葉仮名を「かな」と称していたのが、名称は固定したまま、段々とその実態を変化させて平仮名になった結果、「かな」が平仮名をも指すようになったと見た方が自然である（類例「くるま」。牛や人が引くものから自動車を中心に指すように。車輪のつくものの汎称としても依然機能する）。

②③↓このように考えれば、「仮名」の語が万葉仮名の意義と平仮名の意義、また平仮名以外の表音文字の汎称としての意義とを包含する理由が理解しやすい。

は、「仮名」と「片仮名」との関係性

②④もし「仮名」が当初より平仮名・片仮名の総称だとしたら、なぜ片仮名は「片仮名」なのに、平仮名は「く仮名」でなく総称と同じ「仮名」なのか。

②⑤また、もし「仮名」が当初平仮名を指す語として生じたと見た場合、その派生語を名に持つ「片仮名」は平仮名の変種と捉えられたことになるが、平仮名（仮名）概念・片仮名概念の成立時期や前後関係が不明で、それぞれの沿革上のどの段階で「仮名」「片仮名」と初めて命名されたのか定かでない。平仮名と片仮名との関係性をうまく説明できない難がある。

②⑥そもそも、平仮名は万葉仮名自体が段々と変化して出来た文字であり、その中間に曖昧な段階が存在する。対して、省画の字体がその大部分を占める片仮名は、万葉仮名の段々の変化ではなく意図的に省略して即座に作り出される文字であり、形の違いが明瞭である。

②⑦↓「仮名」が元来万葉仮名を指したものと捉えれば、「片仮名」は、万葉仮名から生まれた変種としての命名と理解でき、万葉仮名の直系である平仮名は、万葉仮名から地続きの連続的な変化の中でそのまま元の呼称である「仮名」の語を継承したと理解できる。

②⑧↓以上の三点から、「仮名」は仮名文字に対する命名と考えるよりは、元来万葉仮名を指している、それが後に平仮名やその周辺の文字をも指すようになったと見た方が自然である。

第五節 「仮名」の発生時期と沿革 附・「平仮名」

②⑨「仮名」の語の成立時期は定かでない。「かりな」の「な」は文字の意味だが、文字を指す中古の語は「もじ」。それ以前の古語を継承しているか。上代とまでは特定できないが、少なくとも平仮名・片仮名が確立する以前からあった語ではないか（但し「字」を文字の意で

「な」と訓読する古い例は、『日本書紀』前田本・卷第廿の院政期点。「字隨羽黒」。

③〓「仮名」の語義の二面性は、万葉仮名と平仮名との歴史的なつながりを示すものと捉えることができる。「仮名」と呼ばれた万葉仮名そのものが変化して平仮名が成立したことで、「仮名」の名が平仮名に継承され、「仮名」は両方の意義を含むことになった（その「仮名」の内の違いを表す語が「女手」「男手」であったか）。日常生活一般で最もよく使う仮名が平仮名であったから、やがて「仮名」は万葉仮名よりも平仮名を代表するようになり、以後、平仮名が「仮名」の標準としての地位を占めつづけることとなった。

③①「平仮名」の語の登場については、平安末以降、平仮名を指して「常の仮名」（古来風体抄、入木口伝抄）、「普通の仮名」（入木口伝抄）などと呼んだ例が見られる。真名仮名や草仮名などに対する、最も一般的な仮名としての呼称。室町時代の「ひら」にも「普通」という意味があり（平公家、平侍、平秋など）、古来の普通の「仮名」に明示的な呼称を付けたものと捉えることができる。「平仮名」の意義を仮名手本のいろはの字体に限定する説もあるが「1」、その説の是非を含めて今後検討の余地がある。

参考文献

- [1] 山内洋一郎「ことば「平仮名」の出現と仮名手本」『国語国文』八十一・二、平成二十三年
- [2] 山田健三「書記用語「万葉仮名」をめぐる」『人文科学論集 文化コミュニケーション学科編』四十七、信州大学人文学部、平成二十五年
- [3] 山田健三「仮名概念はいつ生まれたか 「書記用語「万葉仮名」をめぐる」補説・再説」『ことばの研究』十二、長野県ことばの会、令和二年
- [4] 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男（校注・訳）『源氏物語③（新編日本文学全集22）』小学館、平成八年
- [5] 三谷栄一・三谷邦明・稲賀敬二（校注・訳）『落窪物語 堤中納言物語（新編日本古典文学全集17）』小学館、平成十二年
- [6] 久曾神昇（編）『日本歌学大系』別巻四、風間書房、昭和五十五年
- [7] 京都大学文学部国語学国文学研究室（編）『諸本集成 和名類聚抄』本文篇、臨川書店、昭和四十三年
- [8] 神道大系編纂会（編）『神道大系 朝儀祭祀編二 西宮記』同刊、平成五年
- [9] 梅村玲美『日本紀竟宴和歌の研究——日本語史の資料として——』風間書房、平成二十二年
- [10] 幼学の会（編）『口遊注解』勉誠社、平成九年
- [11] 古典研究会（出版）『金光明最勝王経音義（古辞書音義集成 第十二卷）』汲古書院、昭和五十六年
- [12] 築島裕（編集委員会代表）『古語大鑑』第二巻、東京大学出版会、平成二十八年

付記 本発表はJSPS科研費[P20J14853]の助成を受けたものである。